契約妻は極上御曹司に秘めやかに愛でられる

プロローグ

恋人の浮気で恋が終われば、しばらくは恋愛と距離を置きたい気分になる。

そんな時にもたらされた訳アリのお見合い。

愛情なんて不確かなものよりも、明確なものが得られるのであればそれで構わない――そう割り切って、寺田紗綾から永家紗綾へと名字を変えた。

事情があって入籍をしただけで、いまだに一緒に暮らしてもいない。もちろんお互いに恋愛感情などない。

そんな名ばかりの夫の膝の上に、紗綾は抱きかかえられていた。

「こっちへおいで」と誘う言葉に素直に従って、ソファに座る彼――央臣の隣に腰を下ろす。

「お、重いですよ……」

「紗綾は重くない。むしろ体重少し減ったか？」

毎度ソファに座るなり抱き上げるのは、まさか紗綾の体重の増減を知るためではあるまい。

「変わらないと思います」

「なら気にするな」

央臣はそう言うと、背後から腕をぎゅっとまわして抱きしめた。そのまま紗綾の首筋を啄むように口づける。それがくすぐったくて肩をすくめると、大きな掌が胸を覆った。いつの間にかシャツのボタンをはずしたのか指先が素肌を這う。
「んっ」
紗綾が思わず声をもらせば、ブラの隙間から入り込んだ手が胸の先をくすぐった。それだけで体が小さく跳ねる。
「紗綾、こっちを向いて。口を開けて」
央臣の台詞に素直に応じるのは恥ずかしい。自ら深い口づけを求めているようなはしたなさを感じるから。
でも、今の紗綾は口の中も性感帯の一部であることを知っている。それも彼によって教えられたことのひとつだ。
夫を見上げておずおずと口を開けた途端、彼の舌が素早く入り込む。唾液の味を確かめるかのように舌先をこすりつけ、それからゆっくりと絡め合った。
舌の動きに合わせるようにしながら互いの口内を探る間も、胸の先を弄る動きは止まらない。
指と舌とで様々な感覚を与えられるごとに体が震えると同時に、足の間が湿り気を帯びてきた。スカートの裾をたくしあげた手が、下着の上からそっとその部分をなぞる。
脚を閉じようとすれば、央臣は自身の膝でそれを阻んだ。
「あっ……あんっ」

下着越しで痛みがない分、鈍い刺激が優しく届く。
上下に軽くこすったかと思えば、軽く押さえたまま揺らされる。彼の指の動きが大きくなるごとに敏感な粒は膨らみ、軽い痺れが幾度も起こった。
「紗綾、濡れてきた」
「んんっ、やぁ」
「ここもすぐに顔を出すようになったな」
知識としては知っていても、気持ちいいと思ったことはあまりなかった。刺激が強すぎれば痛いだけで、紗綾としては触られるのが苦手な場所。そこが膨らむことも濡れることも、そしてそこから生じる快楽がどれほどのものかを知ったのも、彼に触れられるようになってから。
濡れた下着が張りつくのがわかる。一定の刺激が続いてもどかしくなったところで、体がびくびくと震えた。
「ふっ、あんっ」
央臣は動きを止めて紗綾の体をぎゅっと抱きしめた。それは紗綾が快楽に怯えないようにするためでもあり、馴染むようにするためでもあるのだろう。
紗綾の呼吸が落ち着き始めたのを見計らったように、彼の指が下着を避けて直接その部分に触れた。
「あっ、やっ、だめっ」
「だめ？　こんなに奥に溜めておいて？」

ほんの少し意地悪な口調で、央臣は紗綾の耳たぶを食(は)みながら伝えてくる。彼の言う通り奥に溜まっていた蜜が彼の指を汚しているのだ。
「これは紗綾が気持ちよくなっている証拠だ」
そう言って、彼は何度か指を往復させて中をかきまぜる。あえて蜜の音が立つような指の動き。
一度軽く達したせいで敏感になったそこは、些細(ささい)な刺激にもすかさず反応する。
「はっ……あんっ、あっ」
「ほら、気持ちいい。どんどんあふれてきた」
「あっ、やっ……」
彼が口にするたびに敏感な粒は膨らみ、蜜はとめどなくあふれ、これが快楽だと伝えてくる。
胸の先に触れていた手が下腹部へ伸びた瞬間、なにをされるか気づいて紗綾は体を強張らせた。
「大丈夫だ、紗綾。気持ちよくなるだけ」
「あっ、あっ、やぁあ」
膨らんだ粒を指がくすぐり、数本の指が中に入ってきた。紗綾のそこは指を拒むどころか喜んで受け入れて、さらに奥へ奥へと引き込もうと勝手に締め付ける。
お尻に彼の固いものが当たる。首筋にかかる彼の吐息も荒い。
「あっ、だめっ」
「だめじゃない。イイだろう？　ほら、ここ」
すでに知られてしまった弱い場所を、央臣の指が器用にえぐる。指が出入りするたびに卑猥な音

は増し、紗綾の脚が跳ねるように揺れた。
彼に触れられるようになっても、衣服をすべて剥(は)がされることはなかった。ましてやいまだに彼のものを受け入れたことさえない。
――君の体がこの行為に慣れるまで。
彼はそう言って紗綾だけを果てに導く。
「あんっ、いい。気持ちいいっ」
「ああ、気持ちいいな」
「いいのっ、気持ちいいのっ」
いつからだろうか。怖かったはずの未知の感覚に怯えなくなったのは。
むしろもっと気持ちよくなろうと求めるようになったのは。
疼きが急激に広がって紗綾は再び全身を強張らせた。
「紗綾、愛らしい顔を見せて」
「あっ、やっ……んんっ」
中と外とをひときわ激しく弄られて、紗綾は高い声をあげた。
彼の腕の中で体を震わせながら達する。
いやらしい表情をしているだろう顔を、央臣は愛しそうに見つめて、そっと口づけてきた。
彼がなぜ自分に結婚を申し込んできたのか、なぜ子作りのための行為にここまで慣れさせる必要があるのか。

夫の真意などいまだに知りようもない。
ただ今の紗綾は、達した後だからこそ起こる体の奥の渇望に気づいている。
快楽を存分に味わったはずなのに、切ない疼きが生まれているのだ。
いつ一緒に暮らすことになるのか。
いつになったら最後までするのか。
聞きたいのに聞けないのは自覚しているからだ。
自分が彼にとってお飾りの妻であることを――

＊＊＊

紗綾は『じゃあ、また次回ね』と言うと、ＷＥＢ会議の画面を閉じた。ヘッドフォンをはずし、首をまわして疲れた肩をほぐす。
紗綾が勤めている会社は、様々な形でキャリア支援をする大手企業だ。リクルーティングやリスキリングのサポートがメインで、オンラインの学習塾も運営している。
その延長線上で、数年前に海外大学留学支援部門が設けられると、紗綾はそこに配属された。中学、高校、大学でそれぞれ一年間の交換留学の経験や、国際バカロレア校出身であることが考慮されたようだ。
海外大学進学を目指す高校生に対して、必要な支援を全般的にサポートするのが仕事で、基本的

にオンラインなので、週に一度出社する以外はリモートワークにしている。
紗綾は、面談を終えた生徒の進捗状況と次回までの課題などを業務記録シートにまとめた。海外大学受験を乗り切るには、様々なタスクを同時進行でこなす必要がある。スケジュールを調整すると同時に、受験生のメンタルにも注意を払わなければならない。
紗綾が業務記録シートに記入していると、テーブルに置いていたスマートフォンが振動した。
あまり連絡をしてこない叔父からのメッセージに、紗綾は何事かとメッセージアプリを開く。
「なにかあったのかな……？」
紗綾は幼い頃に両親を事故で亡くし、母の兄である叔父夫婦に引き取られた。
子どものいない叔父夫婦は、紗綾を我が子のように大事に育ててくれた。小さな工場を経営して経済的に余裕があったため、惜しみなく教育費を出してもらえた。だから紗綾は、小学校から大学までエスカレーター方式であがれる私立学校に通うことができたのだ。
巷ではお嬢様学校として名前が通っていることもあり、就職や婚活にも有利に働いた。
『申し訳ないが、一度家に帰ってきてほしい。直接会って相談したいことがある』
表示されたメッセージを見て、紗綾は眉根を寄せた。
会って話したいとわざわざ言うぐらいだ。電話では話せない内容なのだろう。
なにより、紗綾には叔父が相談したいという内容に心当たりがあった。
叔父が経営している工場は、取引先の企業の注文に合わせて様々な部品を作る機械工場だ。元は叔母の実家の家業で、叔父が婿養子に入ってそれを継承した。中小企業ながらも、一時期は特定の

分野でシェアを独占したこともあった。
ただ、地道で繊細な作業のせいか、やがて人手が足りなくなり、紗綾が小学生ぐらいの頃にはアジア出身の技能実習生を雇用し始めた。彼らが日本で生活するためには様々な支援が必要で、紗綾は必然的に英語を覚え、従業員の生活が円滑にいくよう手伝っていたのだ。
紗綾が英語を習得したのは、そういった環境にいたことも影響している。
一時期は多くの人を雇用していたが、時代の変化は激しい。
取引先の企業が製作をやめてしまえば、部品の仕事もなくなる。叔父は必死に新規開拓して、経営と雇用を維持してきたが、最近は雲行きが怪しくなっていた。
実家に帰るたびにそれとなく、経営が厳しいらしいという話を耳にするようになったのだ。
叔父に直接聞いたこともあったが、紗綾に心配をかけまいとしてか、ずっとはぐらかされている。
「やっぱり……経営が厳しいのかな」
跡を継いだほうがいいか問うたこともある。工業系の学部への進学も検討した。でも叔父は『紗綾は自分のやりたいことをやればいい』と首を横に振った。
後継者がいない中小企業の継続は昨今の課題だ。後継者を探すにしても廃業するにしても、おそらく大変な作業になる。
「それとも、もしかして……別れたことが耳に入ったのかな」
数か月前、紗綾は二年付き合った恋人、飯沢凌平と別れた。
お嬢様学校の友人たちの伝手で知り合った、紗綾より三歳年上の少し大きな会社の跡継ぎだ。生

まれた時から苦労など一切知らないがゆえの、育ちの良さが際立っていた男性だった。
やや垂れた細い目に神経質そうな口元で、頼りなさそうな印象もあったけれど、穏やかで優しい性格。紗綾は、友人たちに『顔立ちは綺麗なのに地味に見えるから、きちんとメイクはしなさいよ』なんてアドバイスされるタイプだ。真っ黒なストレートロングの髪のせいか、意思がはっきりした性格なのにおとなしく見られる。
お互い静かに過ごすのが好きで、なんとなく会うようになって自然に関係が始まった。
交際当初から、彼は跡継ぎとしての社交の場に紗綾を連れ出していた。あまり気乗りはしなかったものの、彼側の事情は理解できたのでできるだけ付き添った。
公の場に二人で参加することが増えれば、周囲は結婚前提なのだろうという目で見るようになる。
そんな関係が二年も続けば、はっきりとした言葉がなくとも結婚は時間の問題。交際はそれぞれの家族も知っていたし、凌平には叔父の会社の件も相談していた。
御曹司である凌平なら、人脈もコネも資金もある。技術が消えてしまうのは惜しいと言ってくれた言葉に密かに期待していた。
だからあの日、人混みの中で凌平が女性といる姿を見た時、自分の中に生まれた感情に紗綾は戸惑った。
なんとなく違和感はあったのだ。メッセージアプリの返信がなかったり、デートを直前でキャンセルされたりし始めてから、「他の女性と一緒にいた」なんて噂話が耳に入るようになったから。
凌平と腕を組んで歩いていたのは、ふわふわの明るめの髪をした小柄な女性。ドット柄のワン

ピースの胸元がやけに開いている。涙袋を強調した童顔メイクをしており、庇護欲をそそるかわいらしさがあった。

紗綾が凌平の名前を呼ぶと、彼はあからさまに動揺して、叱られた仔犬のように『ごめん』と謝罪した。彼女のほうは不安そうに凌平を見上げつつも、組んだ腕を解きもしない。

『君を傷つけると思うと言えなかった』と、凌平は浮気をそんな言葉で認めて、『恋人がいるのは知っていたけどあきらめきれなくて……』なんて、女性のほうもさも辛そうな表情で正当化する。

人目も憚らずいちゃついた彼に失望したものの、紗綾は相手の女性を見ても怒りや嫉妬の感情は湧かなかった。それどころか二人を見かけた瞬間、気のせいにして見なかった振りをしようとさえ思った。

実家の経営する工場の窮状を訴えれば、優しい凌平なら力になってくれるかもしれない。そうなるなら、多少の浮気ぐらい目をつぶってもいい――そんな打算的な感情が己の中にあったことに、気づいてしまった。

だから紗綾は、まるで茶番のような言い訳をそれ以上聞く気になれず、あっさりと自ら別れを告げたのだ。

結婚を視野に入れていた相手に浮気されて別れたなんて言いづらくて黙っていたけれど、凌平の立場上、叔父の耳に入った可能性はある。

「会社のことか、別れたことか……それとも両方かな」

どちらにしても憂鬱なことには変わりない。紗綾は覚悟を決めて帰省できる日を叔父に返信した。

紗綾が小学生の頃、叔父の経営する工場は自宅の隣にあった。

大口の取引先との専属契約が叶った時に、少し離れたところに広い土地を購入して新しい工場を建てて移転したのだ。今その跡地には小さなアパートが建ち、工場勤務の外国人労働者たちが社宅として住んでいる。

「おー、サヤ、おかえり」

「サヤちゃん、かえってくるのひさしぶり」

帰省した紗綾を見かけた外国人の従業員が、日本語で話しかけてくる。

「ただいま！」

紗綾は、にこりと笑って懐かしい人たちと挨拶をかわした。

彼らが働き始めた当初は拙かった日本語も、今では随分上達している。紗綾はいつものように、雑談を通して、困ったことはないか、懸念事項はないかなどをさりげなく問う。紗綾にとっては彼らは家族みたいな存在だ。

「サヤ、社長、最近元気ないぞ」

「……そう」

「うん。あまり見かけない人が出入りしている」

彼らは不安げな表情を浮かべて口々に言う。従業員が気づくほど、会社の経営はうまくいっていないようだ。

一度は凌平の紹介で、銀行の融資担当者と会って相談したこともあった。叔父は『大丈夫だ』としか言わなかったけれど、その場しのぎにしかならなかったのだろうか。

自分になにができるのか……紗綾は迷いながらも「教えてくれてありがとう。大丈夫だから」と叔父と同じ言葉を、笑みを浮かべて言った。

自宅の応接間に入り、紗綾は叔父夫婦と向かい合う。

玄関脇に設置されたこの部屋は、叔父が大事な取引先をもてなす時に使用する場であって、これまで掃除以外で紗綾が出入りすることはなかった。だから自宅のはずなのに、他人の家にいるようで居心地が悪い。

叔父はもうすぐ還暦だが、今でも積極的に現場に出ていることもあって若々しい。ほっそりして優しい顔立ちなので、穏やかで知的な雰囲気を醸し出している。

叔母は叔父の三歳年下で、見るからにお嬢様育ちでやわらかな朗らかさのある女性だ。世話好きな性格で、だから紗綾を引き取る時も快く応じてくれた。

そんな常に優しくほほ笑んでいる二人の表情が、今日はぎこちない。

いつもなら、最近はどう？　と気楽にお互いの近況から始まるけれど、紗綾が最初に聞かれたのは凌平との関係についてだった。

叔父夫婦が発する固い空気に圧されつつ、紗綾は数か月前に別れたことを伝えた。

「そうか……凌平くんと別れたという話は本当なんだな」

ぼそりと呟いた叔父に、紗綾は首をかしげる。

どうやら叔父は、誰かからすでに紗綾たちが別れていたことを聞いていたようだ。

凌平が特別な立場にあるせいか、いつの間にか自分たちの交際が広まっていた時と同じく、破局もすでに知られていたのだろう。

やはりそれを心配して、呼び出されたのだろうか。会社だけでなく自分のことでも負担をかけていたのなら申し訳なく思う。

「紗綾は凌平くんのことを、まだ引きずっていたりするのか？」

「いいえ。別れた時点でふっきれている」

叔父夫婦がどこまで話を知っているのかわからない。恋人に心変わりされて、浮気されて別れたなんて、できれば詳細は知られていないといい。あまりいい別れ方ではなかったから。

「新しい恋人とかは？」

おずおずと切り出す叔母に、紗綾は首を横に振ることで否定する。

叔父夫婦は顔を見合わせて、少し悩む素振りを見せた。そして意を決したように紗綾を見つめる。紗綾も背筋を伸ばして身構えた。

「うちの経営が厳しい状況にあったことは紗綾も気づいていたと思う」

話題が急に切り替わったうえ、これまでずっと濁していたことを叔父が口にして、紗綾は驚いた。

「私もいろいろやってきたがうまくいかなかった。だが、つい最近とある人からうちに融資をしてもいい、という申し出があった」

よかった！　と思ったのは一瞬だ。ありがたい申し出のはずなのに、なぜか二人の表情は硬い。

「あなた……やっぱりやめましょう。こんな、こんな話」
叔母が泣きそうな声で叔父を止めた。
「いや、紗綾には話しておいたほうがいい。ずっと会社のことも従業員のことも気にかけてくれていた。紗綾もこの会社の一員だ」
「でも……」
叔父が緩やかに首を横に振ると、叔母はそこで口を閉ざした。
「このままだと廃業、最悪の場合は倒産も覚悟していたからありがたい話だ。融資だけでなく、経営の立て直しの支援もしてくれると。ただ、条件を提示された」
「条件……」
叔父の工場では、その技術力の高さから特許を取っているものがいくつかある。それらのライセンスを奪われるのか、それともリストラを強制されるのか、もしくは経営方針をがらりと変えられたりするのだろうか。
二人の険しい表情から、どんな痛みを伴う条件が課されたのだろうかと不安を覚える。
「先方は、融資との引き換えに紗綾との結婚を望んでいる」
「けっこん……って、え？　私との結婚？」
予想もしない単語が出てきて、紗綾はすぐには意味が把握できなかった。
やがて、ああ、だから最初に凌平との関係がどうなっているのか聞いてきたのかと腑に落ちる。
人のいい彼らが口ごもっていたのも、叔母の暗い表情も理解できた。融資と引き換えの結婚なんて、まるで引き取った娘を金目当てで売り飛ばすようなものではないか。
実の子ではなくとも、彼らは紗綾をかわいがってくれた。
叔母の親族からは『引き取った子なのに、私立の学校に通わせるなんて贅沢よ。ましてや留学までさせるなんて』と言われていたことも知っている。
大学を卒業後は家業を手伝おうと思っていたのに、彼らは他の世界も知りなさいと、就職先を自由に選ばせてくれたし一人暮らしもさせてくれた。強制など一切されなかった。
だから紗綾は自分にもなにかできないかと、英語学習に力を入れた。いつか従業員の生活のサポートを手助けすることで会社に役立ちたいと思って、頑張ってきた。彼らの子どもとして恥じないよう振る舞ってきた。
経営の厳しい工場の融資の条件が――自分との結婚。
（まさか、このご時世でそんな申し出がリアルにあるなんて……）
そしてそれがわが身に振りかかるなんて、想像もしていなかった。
紗綾は驚きながらも冷静に考えてみる。
融資と引き換えの結婚など、相手にどんなメリットがあるのか。
もしかして相手はものすごく年が離れていて、若い後妻目当てだろうか。それとも変な性癖があるとか、こうでもしないと結婚に縁のない人とかだろうか。余命いくばくもないから思い出になんてパターンもありそうだ。
だが、さすがにそんな変な相手と結婚させるような二人ではないはずだ。どれだけ経営が厳しく

とも断ったに違いないと、紗綾はそういう意味では彼らの愛情を疑ったことはなかった。
叔父はテーブルの上に、見合い写真と釣り書きらしきものを置いた。紗綾はそっと手に取って写真を見る。
「永家央臣くんだ。紗綾は彼を知っているかい？」
紗綾は思わず目が点になった。
お見合い用にわざわざ撮ったものだろうか、まるで俳優かモデルのブロマイドのようだ。ダークブルーのスーツは彼の体にフィットしていて、スタイルと品の良さが伝わる。
すっと通った鼻筋に、やや隙のある口元には仄かな色香。切れ長の目は涼しげで、冷たい鋭さがある。ふわりとした髪を後ろにきちんと撫でつけているからか、凛とした硬派な雰囲気がする。
「……話をしたことはないけど、パーティーとかで見かけたことなら何度か」
凌平と公の場に参加すると、たまに彼に遭遇することがあった。
大企業の御曹司で、彼自身仲間と一緒に起業して会社を経営していて、そのうえ人目を引くほどの整った容姿をしている。いつも人の輪の中心にいて、派手な集団の中でもひときわ目立っていたので、紗綾も存在を認識していた。
ついでに、連れ歩く女性は毎回違う人だとか、過去には女優やモデルと交際していたとか、自由な恋愛を楽しんでいるとかいった噂も耳に入る。
自身の容姿の良さをうまく利用しているのか、メディアにもたまに露出しており、『影響力のある三十代』や『将来有望な若手経営者』というような雑誌の特集でも名前の挙がる人物だ。

良くも悪くも噂に事欠かず、凌平とは対極にいるような華やかな男。
（……なんでこの人が）
相手など選び放題の彼が、なぜ融資の条件に紗綾との結婚を申し出たのか。
「紗綾にずっと好意を抱いていたらしい。凌平くんの存在があったから行動に起こせなかったと言っていた。だが、別れたと聞いて見合いを申し出てきたんだ。うちの現状を知っていたようで、妻の実家を援助するという名目があれば融資もできる、と」
（嘘）
紗綾は咄嗟にそう思った。
見かけたことはある。名前もある程度の経歴も知っている。だが、それは彼が目立つ存在だからで、紗綾とは目が合ったこともなければ、話をしたこともない。接点など一切ないのだ。
名のある相手でなければなにかの詐欺だと疑うレベルだろう。
訝しげな様子の紗綾に気づいたのだろう、叔父も微妙な表情をする。
お見合い相手としては悪くないはずなのに、叔父夫婦の表情がずっと冴えなかったのは、紗綾同様この話になにか裏があるのではないかと疑っているからなのだ。
「彼の言うことをどこまで信じていいのかはわからない。それに、私は会社のために紗綾に結婚を強制する気もない。だから、嫌なら断っていい」
「そうよ、そう。紗綾、断っていいのよ。会社のことなんか気にせず、紗綾が決めていいの」
「だが、本来なら悪くない相手だ。一方的に疑ってかかって紗綾に話さないのもどうかと思っ

て……」
二人はきっと随分悩んだに違いない。紗綾に話さずに断ることもできただろう。けれど融資の可能性があるうえに、相手が永家央臣だったから。
――自分に好意を抱いていた？
万が一それが本当ならば、普通に交際を申し込めばいいではないか。だが、それだと紗綾はきっと速攻でお断りしただろう。やはり、融資をチラつかせて叔父に結婚を申し込んだのには、なにか思惑があるに違いない。
それでも二人は迷いながらも、結局はこの話を紗綾に聞かせた。経営がかなり厳しい状況にあることがうかがえる。
「話もしたことがないから……この方の真意はわからないけど、とりあえず一度会ってみる」
「紗綾、会社のことは――」
「うん、わかってる。会社のことは関係なく話を聞いてみるだけ。もしかしたら、そんな変な条件なしに融資してもらえるかもしれないし」
融資の可能性が少しでもあるのなら、賭ける価値はあるはずだ。会って話を聞いてみないことには彼の思惑だって見抜けない。
それに紗綾は元々恋愛にあまり興味はなかった。結婚も縁があればするし、しなければしないで構わないと思っていた。
凌平とだって、誘われて嫌じゃなかったから会って、一緒に過ごす時間が穏やかだったから結果

的に二年間続いた。長く付き合ったし、年齢的にもそろそろ結婚の話が出てもおかしくはないだろうと感じていただけで、強く望んでいたわけでもない。別れた今では、本当に好きだったのかさえ疑問だ。
昔はお見合い結婚が主流だったし、今も婚活という初対面の人間同士の出会いの場がある。
融資は絡んでいるが、それと同じだと思えばいい。実際に会ってみれば、きっと彼に対するイメージだって変わるだろう。
それに――不確かな愛を得るよりも、確実な金銭を得ることのほうが今は重要だ。
割り切った見方をすれば存外いい話なのかもしれないと、紗綾は少しだけそう思った。

＊＊＊

永家央臣、紗綾より五歳年上の三十二歳。
写真とともに渡された釣り書きには、彼の華麗な経歴がここぞとばかりに並んでいた。
御曹司という立場は凌平と同じだが、学歴も経歴も雲泥の差。そのうえ整った容姿とカリスマ性を備えている。
社交の場で見かけた様子や、耳にした女性関係の噂話から、紗綾はなんとなく苦手意識を抱いていた。本来なら近づきたくない相手だ。
お見合いの席はホテルのラウンジではなく、格式の高い料亭の個室に設けられた。雪見障子のガ

ラスから庭園の緑がかすかに見える。畳敷きのテーブル席だったので、正座をせずにすんだのはよかった。お見合いということもあって、紗綾は振袖を着ていたのだ。

亡くなった実母が成人の折に誂えたもので、深みのある臙脂色に鳳凰や菊、桜などの吉祥模様が配された生地は華やかで、年代を感じさせない。

紗綾側は叔父夫婦も同席しているが、彼のほうは両親が海外にいるらしく本人のみだった。

「はじめまして。永家央臣と申します」

「はじめまして。寺田紗綾です」

初めて間近で聞いた央臣の声は、見た目に違わず低く艶めいて響いた。

紗綾を見る眼差しも真摯な色を湛えており、パーティーで見かけていた時のような、軟派で退廃的な雰囲気は微塵もない。

光沢のある濃紺の三つ揃えのスーツに、首元まできちんと締められたシルバーブルーのネクタイ。緩やかに波打つ髪はきちんと固められて綺麗な額が露わになっている。きりっとした目元からは、女を誘いにかけるような色香はなく、かすかな怜悧ささえ漂う。

「永家くんは海外経験が長いとか」

叔父が緊張を見せながらも落ち着いた口調で話しかける。叔母はやや頬を染めて見惚れていた。

「ええ、高校の途中からイギリスのボーディングスクールへ」

央臣は目元を緩めて淡い笑みを浮かべた。

これまで抱いていた印象とはあまりにも違うやわらかな表情に、紗綾は不覚にもドキッとする。

思わず見入られそうになってそっと視線をそらした。

「紗綾がカナダに交換留学したのは高校生の時だったかな」

「中学の時はニュージーランドで、高校がカナダよ」

叔父に会話を振られてなんとか答える。

当たり障りのない会話を交わす間に、叔父は彼への評価を上方修正しているように見えた。お見合い直前まで気落ちしていた叔母も、央臣の知的な受け答えに感心している。

紗綾だってきっと、これが普通のお見合いであれば頼もしささえ覚えたかもしれない。

（でも、この人は融資と引き換えに私との結婚を望んだ）

パーティーで見かけていた彼とのギャップが大きいがゆえに――逆になにもかもが胡散臭く見える。穏やかな表情も、そつのない受け答えも、時折向ける眼差しも。

紗綾は警戒を解くことなく目の前の男を観察し続ける。

儀礼的なやりとりのあと、叔父夫婦は後ろ髪を引かれるような様子を見せつつも席をはずした。

二人きりになった途端、先ほどまでの空気が嘘のようにしんと静まり返った。なんとなく息苦しさを覚えるのは、着付けの紐のせいだけではないだろう。

央臣の纏う、緊張のような重圧のようなものが伸しかかってくる。紗綾はそれに耐えきれなくなり、すっと背を伸ばすと口火を切った。

「あの……単刀直入にお伺いします。今回のお話の真意を教えてください」

「真意？」

放つ圧とは正反対の、ややとぼけたやわらかい口調で言い、央臣は心底不思議そうな表情をした。
「会社への融資の条件が私との結婚だと聞いています。ですが、私と永家さんがお話しするのは今日が初めてです。永家さんが私を結婚相手に望む本当の理由を教えてください」
「本当の理由？　聞いていないのか？　俺が君を――」
「申し訳ありませんが……それを信じることはできません」
央臣の台詞を遮って、紗綾はきっぱりと言い放った。
叔父は『好意を抱いていたようだ』と言っていた。だが紗綾は、それを聞いて浮かれるようなおめでたい思考をしていない。
聞いた瞬間は、見合い話をスムーズに持っていくための方便だと思った。
案の定、直接顔を合わせたのは初めてだが、彼からは紗綾と対面できて嬉しいだとか、話ができて喜んでいるだとか、そんな好意のある様子は見受けられなかった。
まるで仕事の一環として取引をうまく持っていくために、人当たりの良い仮面をかぶっているように見えたのだ。
央臣は軽く目をみはったあと、考え込むように眉根を寄せた。しばらく思案すると、ふうっと深くため息をつく。
「……信じることはできない、か。だったら、今この場で俺が君に『真意』とやらを伝えても意味はないと思わないか？」
央臣は硬い声でやや突き放すように告げる。

紗綾は一瞬虚を突かれたように目を見開いた。
確かに央臣がどんなに耳に心地よい言葉を並べたとしても、今の紗綾は簡単に信じないだろうし、真偽も判断できない。
「そう、ですね」
うやむやに流された気もするが、納得するしかなくて紗綾は頷く。
「ともかく、俺は君と結婚したいと思っている」
央臣はまっすぐに紗綾を見つめて告げた。
その眼差しに冷たい色は微塵もなく、むしろ仄かな熱さえある。一瞬ドキッとしてしまったのは、こんなイケメンに『結婚したい』などと情熱的な言葉を告げられたせいに違いない。
「対外的な場面では夫婦らしくしてもらいたいが、それ以外では妻としての役割は求めない」
付け加えられた最後の台詞に、紗綾はかすかに息を呑んだ。
――妻としての役割は求めない。
その言葉を噛み締め、胸の鼓動を押さえつけるかのように、紗綾は胸に拳を当てた。
この結婚の申し出には彼なりの事情があるのだろう。だが彼の立場からすれば、それをすんなり明かせないのかもしれない。それがこの一言に集約されているように思えた。
融資と引き換えの結婚――その裏にあるものを紗綾が知る必要はない。なぜなら自分たちは相思相愛で結婚するわけではないのだから。
「この話を受けるか受けないか、選ぶ権利は君にある」

央臣は静かな口調で続けた。
つまり紗綾がこの話を断っても、彼は困らないということだ。彼の妻という立場が得られるのであれば、妻としての役割が求められずとも――愛がなくとも構わないという女性は、いくらでもいるだろう。
だが紗綾は違う。おそらくこの話に応じなければ、融資の機会を失う。そうなれば叔父の会社はよくて廃業、最悪倒産という形になる。
叔父が誇りをもって取り組み大事にしてきた会社を失いたくはない。
日本に来て慣れない環境の中で必死に働いて、技術を磨いてきた従業員たちの努力を無駄にしたくない。
家族のように長く付き合ってきた彼らの雇用を守りたい。
紗綾が欲しいのは会社への融資で、彼が欲しいのは思い通りになる都合のいい妻。
紗綾は口元をきゅっと結ぶ。
叔父は昨夜、嫌なら断っていいと言ってくれた。会社の存続よりも紗綾の人生を優先させてくれた。
彼らはいつだって紗綾に無理強いすることなく、我が子のように手塩にかけて育ててくれた。惜しみない教育も与えてくれた。
いつも優しい叔父。かわいらしく世話好きの叔母。二人のやわらかな笑みを思い浮かべる。
こんな形でも恩返しができるのであれば、断る選択肢など紗綾にはなかった。

会社を立て直せる機会は今しかない。それを逃したくはない。
「あなたと結婚すれば、会社は守られますか？」
「ああ、約束する」
紗綾の問いに、央臣は即座に断言した。
会社が守られるという確約さえしてもらえるなら充分だ。妻としての役割を求められないのなら、むしろ好都合ではないか。
彼の真意がなんであろうとも、名目上の妻になるだけで莫大な融資を受けることができる。
「このお話、お受けします」
「即答していいのか？」
央臣が驚いたように小さく眉尻をあげる。
紗綾からしてみれば悩む時間がもったいない。資金繰りはどんどん悪化するばかりなのだから。
「融資が必要なんです。だからお願いします」
紗綾は姿勢を正すと頭を下げた。
「わかった。では、話を進める。融資をするにあたって、君とは早急に籍を入れる必要がある。あとのことはその都度決めていこう。それでいいか？」
「構いません。あなたのおっしゃる通りに」
これは融資と引き換えの結婚――紗綾は自身に言い聞かせながら深く頷いた。

＊＊＊

央臣と連絡先を交換すると、即座に様々な指示が届いた。

どうやら叔父の会社を融資するにあたって、『結婚相手の妻の実家の家業だから支援する』という名目が必要らしい。そういう理由でもなければ、いくら彼でも大きな資金を動かすことはできなかったのだろう。

お見合い後、あらためて叔父夫婦に結婚を決めた旨を報告すると、叔父と央臣は何度も話し合いをして、銀行をはじめとする関係者とも会っていた。紗綾としても、会社を最優先にしてもらえるのはありがたい。

署名した婚姻届けは央臣の秘書が提出してくれた。新居についても提案された中から希望を伝えればいつの間にか決定していたし、引っ越しも一人で終えた。

これらはすべてメッセージのやりとりのみで事足りたので、央臣とはまったく顔を合わせていない。恋愛を経ない結婚は、ここまで事務的に淡々と進むものなのだと感心したほどだ。

そうして、部屋の片付けやら自身に必要な手続きやらをこなすうちに、あっという間に日々が過ぎた。

ここ最近はちらほらと郵便物も届き始めており、転送もうまくいっているようだ。紗綾はつい先ほど手渡しで受け取った封書をぼんやり見つめると封を開けた。

中に入っていたのはマットな光沢の黒いクレジットカード。

紗綾は封筒に書かれた宛名と、そのカードの裏面にある名前を見つめた。封筒の宛名には漢字で『永家紗綾』とあり、カードの裏面にはローマ字で NAGAYA SAYA と書いてある。

どちらも見慣れない、新たな自分の名前。

こういう郵便物が届くと、本当に結婚したことを思い知らされる。

（むしろ、こんな物でしか結婚した実感が湧かないんだけど……）

紗綾はふうとため息をつくと、ひとまずの礼儀としてクレジットカードが届いた旨を央臣に報告した。仕事中だから今はどうせ見ないだろうと思っていたのに、すぐさま既読になり『生活に必要なものはすべてここから支払うように』と返事が来た。

紗綾は目を細めて、クレジットカードと届いたメッセージを見つめた。それから、いまだに生活感のないモデルルームのようなリビングに視線をやる。

淡い色の床に合わせたソファは薄いグレー。ダイニングテーブルとリビングのセンターテーブルは硬質なホワイトで、同じブランドで揃えた。壁面にはおしゃれな収納棚が並ぶ。

これらの家具も、提案されたカタログ画像の中から紗綾自身が選んだものだ。好みのテイストのはずなのに、いつまでたっても馴染まない。

叔父の会社の立て直しで、央臣が忙しいことはわかっていた。紗綾自身、彼と会って相談したいこともなかったし、どうせ一緒に暮らせば嫌でも毎日顔を合わせることになるのだと思っていた。

――それなのに。

「もう少し狭い部屋でもよかったかも……」
こんな独り言さえ、無機質に響く。
央臣に提案された部屋は駅近のうえ、どれも部屋数も広さも充分あるファミリータイプのものばかりだった。その中から機能的な間取りの部屋を選んだのだが、一人で暮らすには広すぎる。
そう。紗綾は入居して一か月たった今も、一人で暮らしていた。
央臣は元々、勤務先の近くのマンションで暮らしていて、叔父の会社の件が落ち着くまではそこに住み続けるという話だった。
一番広い主寝室らしき部屋には、彼が選んだ大きなベッドだけがぽつんと置いてある。だが、それ以外の家具は一切ないしクローゼットは空っぽだ。パウダールームにも彼の私物はなく、キッチンの食器だって紗綾が持ち込んだものだけ。
央臣に、事前に準備したほうがいい物があるか問い合わせたが、転居時に持参するので不要だとの返事だった。
ほんの少し思う。もしかしたら彼はこのままこの部屋で暮らすことはないのかもしれない、と。
メッセージだけは頻繁にやりとりするが、事務連絡的な内容ばかり。だから紗綾は、夫となった男が本当はどんな人となりなのかさえ知らない。当然、なにを考えているのかもわからない。
「妻としての役割は求めない――ってこういうこと？」
入籍はした。新居も準備した。家族用のクレジットカードも渡して生活費の面倒も見る。だが、会うこともなく、一緒に暮らすこともなく、お互いの生活に干渉しない。

まさしく名ばかり――
「だったら、こんな広い部屋提案しなければよかったのに」
別居婚を考えているのなら、引っ越しの必要性もなかったのではないかとさえ思う。
だが、さすがにそれは叔父夫婦の手前まずいと思い直す。いつ叔父夫婦が新居に遊びに来たいと言い出すかわからない。彼らの前でこそ、夫婦円満アピールして安心させる必要があるのだから。
紗綾が結婚を決めたことを伝えると、彼らは喜ぶどころか困惑していた。融資のために望みもしない結婚を受け入れたのではないかと心配したのだろう。
『籍だけ入れればいいんだって。妻としての役割は求めないんだって』なんて本当のことは言えるはずもない。だから、会って話してみたら素敵な人だったので、彼の好意を受け止めたいという言葉で誤魔化したのだ。
最終的には『だめだったら離婚するから』と言ってみたが、最後まで彼らの不安は取り除けなかったと思う。
紗綾はため息をつきながら、座り心地のいいソファに腰を下ろす。
自室以外はいまだ寛げない部屋。新婚夫婦らしき雰囲気など一切ない。央臣が越してきたら、彼の好みを聞いて一緒に選べばいいかと思っていたが、その機会は来ないかもしれない。
「せめてクッションでも買おうかな」
せっかく届いた家族カードだ。この際だから使ってみようか。だけど、それくらいは自分で買うべきか。

家賃も光熱費も彼の口座からの引き落としで、紗綾の金銭的な負担は軽減された。叔父の会社だって救われた。名字と住むところは変わったが、仕事は続けられている。
だからもし――央臣に本命の恋人や愛人がいたとしても、快く受け入れるつもりだ。
紗綾はクレジットカードをどうすべきか少し迷ったあと、結局リビングに備え付けの収納棚の引き出しにしまった。

＊＊＊

紗綾はスマホで地図を表示しながら、馴染みのない高級住宅街の道を歩いていた。
豪邸ばかりが立ち並んでいるこんなところに、お店があるなんて思えない。だが指定された住所はこの辺りで間違いなかった。
「あ、ここかな」
アンティークな雰囲気の豪奢な洋館に近づくと、表札の隣にお店の名前のプレートがあった。
――結婚指輪を選びに行くから日程をすり合わせたい。
そんな内容のメッセージが届いたのは二週間前。紗綾はそれを読んで一瞬必要だろうか？　と首をかしげた。
紗綾は普段からあまりアクセサリーをつけない。在宅勤務が増えて、出社の機会が減ったこともあって、おしゃれへの意欲が減っているのだ。指輪をつける機会なんてほとんどないと言える。

だが、対外的な場面では妻として振る舞ってほしいと央臣が言っていたことを思い出す。
結婚式や披露宴は叔父の会社が落ち着いてから考えようと、表向きにはそういう話になっているから、その際に使うかもしれない。人前に夫婦として出席する機会があればその時にも。
とはいえ、わざわざ一緒に選びに行く必要があるとは思えなかった。
だから紗綾は、まず『いろいろと忙しいでしょうから、わざわざお店に行かなくてもかまいません』と濁した内容の返事を送った。
マンションも家具もインターネットで選んだのだ。これまで同様いくつか候補をあげてもらえれば、オンラインショップで選んでもらって構わない。
そう暗に仄めかしたのに『うちはオーダーで頼むことになっている』という返事が来て、彼が御曹司であることを思い出した紗綾は素直に空いている日時を知らせた。
そうして迎えた当日、紗綾は少し迷いながらも目当てのお店に辿り着いた。
自宅兼店舗なのだろう。オーダーメイドのジュエリーショップと言われれば納得のおしゃれな外観だ。
紗綾が少し緊張しながらインターフォンを鳴らすと、『お待ちしておりました』と店員らしき女性が出迎えてくれた。案内されて部屋に入れば、すでに央臣がオーナーと思しき女性と打ち合わせをしていた。
「あの……遅くなりました」
「いや、大丈夫だ」

央臣と会うのは叔父夫婦への挨拶以来、二か月ぶり――いや、三か月ぶりだろうか。思わず「お久しぶりです」と言いそうになったものの、紗綾はなんとか適切な言葉を発した。

紗綾にとっては幻の夫のようなものだが、こうして会うと実在しているんだなと思う。

央臣は仕事を終えて来たのだろう。ブルーブラックのシンプルなビジネススーツ姿だ。見合いの時にも思ったが、きちんとした姿をしているとパーティーで見かけていた時のような派手な印象はない。むしろ大人の落ち着きを感じさせて、紗綾はなんとなくそわそわする。

モデルみたいなイケメンで気後れするせいだろうか。それとも久しぶりに会うせいだろうか。

「どうぞおかけください」

当たり前のように央臣の隣に座るようお店のスタッフに促(うなが)されて、紗綾は戸惑いつつもほんの少し距離を空けてソファに腰を下ろした。

紗綾の向かいに座る小柄でふっくらとしたオーナー女性は六十代ぐらいだろうか。にこやかで上品な笑みを浮かべている。

「ご来店ありがとうございます」

「はじめまして。……紗綾と申します」

永家紗綾と名字から言うべきかとも思ったが、なんとなく言いづらくてそう自己紹介する。

「ふふ、かわいらしい方ですね。では、奥様にも説明させていただきますね」

『奥様』と言われて、ドキッとする。

夫となった男のことを、紗綾はほとんど知らない。結婚した実感もあまりないのに、こうして夫

婦として必要な指輪を選びに来て『奥様』と呼ばれるなんて。

いつか、この違和感が薄らぐ日が来るのだろうか。それともいつまでたっても慣れないままだろうか。

オーナー女性からダイヤモンドの基本的な説明を聞きながら、紗綾はぼんやり思う。

デザイン用のサンプル資料を提示しつつ、オーナー女性は希望があればオリジナルのデザインも製作可能だと告げた。

愛し合う二人であればきっと嬉々として選ぶのだろうけれど、紗綾は元々ジュエリーにあまり興味がない。

紗綾はとりあえずデザイン画集をパラパラとめくってみた。結婚指輪はできればシンプルなのがいいし高価でないのがいい。だが、当然ながら値段の記載はない。

いっそ央臣に丸投げしようかと思っていたところで、紗綾はあるページで手を止めた。お揃いの婚約指輪と結婚指輪のデザイン画が並ぶ中に、見覚えのあるデザインがあったのだ。

（お母さんも……こんなのつけていた気がする）

家族でちょっといいレストランに行く際、母は左手の薬指に結婚指輪と婚約指輪を重ねづけしていた。

結婚指輪はシンプルな銀色。V字に緩やかにカーブしており、それに沿うように婚約指輪には一粒のダイヤが。立て爪の指輪は雪の結晶のような形でキラキラしていて、紗綾は時々それを触らせてもらっていた。

お父さんにもらった大事な宝物だと、そう言っていた母の幸せそうな笑顔も思い出す。年々薄れゆく記憶の中で、覚えているもののひとつだ。
「これがいいのか？」
ふと声が聞こえて、紗綾は思わず隣を見た。
思った以上に近い場所に央臣の顔があって、紗綾は慌てて目をそらす。
「あ……いえ」
反射的に閉じようとしたページを、央臣がそっと指先で押さえた。
婚約指輪のダイヤは大きくカットが細かい。お揃いで掲載されている結婚指輪もハーフエタニティでメレダイヤが並んでいる。どちらも華やかで豪華な代物。なにより高そうだ。
「君の細い指には大きすぎる気もするが」
そう、ダイヤは大きい。だから、その通りだと頷こうとしたのに――
「あら、そんなことありませんわ。デザインがシンプルですから、華やかでありながらも上品で、奥様にお似合いです」
オーナー女性がすかさず口を挟む。
「あの、結婚指輪ならもう少しシンプルなものでも……」
小さな声でそう言ってみたものの、オーナー女性は紗綾が興味を示したと思ったのか、ここぞとばかりにサンプルですが、と言って似たデザインの指輪の実物を運んできた。
母を思い出してつい見入ったせいで、値の張るものを選んだ形になり、紗綾は少し慌てた。

融資をしてもらっている身でありながら、衣食住を提供されて、さらにこんな豪華な指輪をもらうわけにはいかない。だが、この場でそれを言うのも、央臣に恥をかかせるような気がしてためらう。
意外にも、央臣はオーナー女性の説明に熱心に耳を傾けていた。結婚指輪だけのはずが、婚約指輪も一緒に購入しそうな流れになっている。
結婚指輪はまだわかる。第三者にわかりやすく結婚したことを示せるからだ。とはいえ、すでに入籍した今、婚約指輪の必要性はあまりない気がする。
でも――
『紗綾が大人になったら……この指輪はペンダントにリメイクしてあげるね』
ふいに母の言葉が思い出される。
その指輪は事故の時に母と一緒に消えて、もうこの世にはない。だから紗綾の胸元を飾ることは永遠になかった。
「手を」
ぼんやり母を思い出していると、突然左手を央臣に取られた。
サンプルであろう二つの指輪がゆっくりと、紗綾の左手の薬指にはめられる。指輪のサイズは少し緩かったけれど、華やかかつ上品なデザインは指で存在感を放っていた。
ダイヤモンドの煌(きら)めきもさることながら、初めて触れた央臣の手の大きさに驚く。紗綾の手をすっぽり包みこむ大きな掌、そして綺麗で長い指。

「いいな。似合っている」
どことなく甘さを含んだ声音に、紗綾は思わず央臣を見た。こちらをまっすぐ見つめる目は優しく温かな光を放っているようだ。こんな穏やかな彼の表情は初めてだった。
「これにしよう。男性用の揃いの結婚指輪があれば、そちらも見せてください」
紗綾は贅沢だと思いながらも、断る台詞を口にできなかった。どくどくとうるさく鳴りだした鼓動を宥めるように、胸元をぎゅっと押さえた。

指輪をオーダーしたあと、このまま解散するかと思いきや「話があるから、食事にでも行こう」と央臣に誘われて紗綾は固まった。
「……どうした？　なにか予定でもあるのか？」
指輪選びにどれぐらい時間がかかるかわからなかったので、今夜は予定を空けている。ただ、いつものように自分が食べる分だけの夕食を準備していた。
それもあって本音では断りたかったが、話があると言われればそうすることもできない。
「いえ、はい。行きます」
下ごしらえしてきた食材が気になりながらも、紗綾はそう答える。
「苦手なものはあるか？」
「いえ、大丈夫です」
「任せてもらっても？」

「はい」
そうして央臣に連れられてきたのは、ジュエリーショップからほど近い場所にある、素朴な雰囲気の定食屋だった。
近所の人が気楽に訪れるのだろう。少し遅めの時間帯だったが、店内は賑わっている。かしこまった店でなくて紗綾は密かに安堵した。
央臣が店に入った途端に他の客の視線が集まって、一瞬しんとなる。まあ、わからないでもない。彼は容姿が整っているというだけではない、強烈な存在感があるのだ。それが整いすぎた容姿と相まって、どことなく冷たい印象を与えるのだと思う。紗綾もいまだに緊張するくらいだ。
幸い個室が空いていたのでそこを選んだ。
「君は、アルコールは？」
「いえ、今夜は結構です」
お互いに、メニューの中からおすすめらしき定食を注文した。
掘りごたつ式の小さな個室は、最初こそ周囲の注目を浴びずに済むとほっとしたが、今は二人きりであることを意識してしまう。なにより空気が重苦しい。
「今日はありがとうございました。お時間まで取っていただいたうえに、結婚指輪をお願いするだけの予定だったのに、あんな素敵な婚約指輪まで。でもちょっと贅沢過ぎた気もしていて……すみません」
無言の時間が耐えられなくて、紗綾はとりあえずお礼を述べた。

オーナー女性と彼との会話に割り込むこともできず、ためらっている間にあれよあれよと決まっていった。央臣が当たり前のように選んだ、最上級のグレードのダイヤモンド。永家家としては当然の格なのかもしれないが、紗綾としてはやはり萎縮してしまう。
「本当は気に入ってない？」
「え？」
「君が目を留めたからあれにしたが、もし本当は嫌だったら、別のものに選び直そう」
まさかそんなことを言われると思わず、紗綾は慌てて否定する。
「嫌なんてそんな！　ただ、申し訳なくて」
「申し訳ない？」
「金銭的な負担をかけてしまったことです。融資もしていただいているのに……」
「融資とこれとは別だ。君が気に病むことはない。それに必要なものだからな」
央臣は淡々とした口調で言う。彼にしてみたらこれも必要経費のひとつということか。
「それよりも……俺は対外的な場面では妻として振る舞うことを望んでいるんだが」
彼が言わんとすることがわからず、紗綾は首をかしげた。
「さっきの店はうちの御用達だ。なんとか誤魔化したが、君の態度は結婚したばかりの男女とは思えないものだった」
紗綾は思い返してみる。
確かに一般的なカップルであれば指輪を選ぶ大事なイベントなのに、新婚ラブラブな雰囲気は微

塵もなかった。紗綾はどの指輪を選べばいいか迷っていたし、遠慮もしていた。央臣に対してもずっと敬語だった。
ああ、だから彼のほうがらしくない甘めな空気を出していたのかと腑に落ちる。
「これまで忙しくて君との時間が取れていなかったからな。もう少しなんとかしないと、このままじゃ周囲に怪しまれる」
確かに見合いの席で、央臣がそんなことを言っていたのを思い出す。
（そうか、ああいう場面でこそ夫婦として振る舞わないといけないのか！）
紗綾は今さら気づいたようにはっとした。
「す、すみません」
結婚したという事実は認識していても実感はない。いまだに一緒に暮らしていないし、そもそもほとんど会ってもいないのだ。お互いに知らないことのほうが多いし、もちろん恋愛感情もない。
だからどうしても他人行儀になってしまう。
「謝らなくていい。だが、いつまでも君がこんなふうに警戒心露わだとやりづらいな」
本音を言えば、それは仕方がないのでは？　と紗綾は内心思った。だが、融資の条件のひとつではあるのだから、人目があるところでは夫婦の演技をしたほうがいいだろう。
食事が運ばれてきて、紗綾は気を取り直して箸を手にした。
央臣が頼んだのはとんかつ定食で、紗綾が頼んだのはエビフライ定食だ。ご飯と味噌汁以外に、野菜サラダやおひたし、茶碗蒸しまでついていた。央臣を前にした緊張で食欲なんかないと思って

いたのに、口にした瞬間ふわりと気持ちがほぐれる。
どれも丁寧に作られていて優しい味だ。エビフライのタルタルソースも自家製のようで、ぴりっとしたピクルスがアクセントになっている。
（おいしい！　茶碗蒸しも出汁と卵の味がしっかりする）
普段おひたしはポン酢をかけただけで手抜きしているので、やはり丁寧に出汁を取るとおいしいのだなと思った。
「うまいだろう？　このお店」
「はい！　おいしいです。すごく丁寧に作られているのがわかります」
紗綾も節約のためにできるだけ自炊はしているものの、一人なのでどうしても手を抜いてしまう。家庭料理の定番メニューでも、手間をかければここまで味わい深いものになることに感心する。
「店主は老舗の和食店で修業した経験がある。以前は高級路線の料理で勝負していたが、ここに移転してからは誰もがふらりと立ち寄れるようなお店に変えたんだ」
やけに詳しいのは常連だからだろうか。御曹司なので、おいしい店にはよく通っているのかもしれない。そういえばお見合いの席も趣のある雰囲気のいい料亭だった。
「和食がお好きなんですか？」
「そういうわけでもないが、まあ、食べるならうまいものを食べたいと思う。それに……こだわりを持って取り組む料理人に興味がある」
高級だとか、ガイドブックの星がついているといった点では選んでいないということだろうか。

結婚指輪もブランド物ではなくオーダーメイドだ。もしかしたら今着ているスーツもそうなのかもしれない。
「君は？」
「私は人と会う時しか外食はしないので、特にこだわりはないです」
指定された店に行くだけだし、一人で外食もしない。
「普段は自炊？」
「そうですけど、別に料理が得意なわけではないので……」
食にこだわりがありそうな央臣に手料理を振る舞う場面を想像してみるが、いつも紗綾が食べているものを出したら大変なことになるのではないだろうか。
（納豆ご飯だけの朝食とか、食べさせたら怒られそう）
「君の手料理には興味があるが、警戒せずとも無理に作らせたりはしない」
央臣は苦笑しつつそう言う。
どうやら彼は他人の機微を読み取るのに長けているようだ。さすが自ら起業して成功しているだけはある。
逆に紗綾には、央臣が本当はなにを思っているのか、考えているのかちっともわからない。
けれど、こうして何気ない会話が続くことにほっとする。名ばかりの結婚相手でも、人として歩み寄ることはできるのかもしれない。
「警戒しているわけではないんですが、ただ食にこだわりがありそうなので、私の料理には満足で

きないかも――」
「俺は料理が趣味でもあるから、君が苦手でも構わない」
「お料理が、趣味」
紗綾は心から驚いて思わず瞬(まばた)きを繰り返した。
あまりにも意外すぎてそれ以外の言葉が出てこない。ただ、思い当たる節はあった。
家電を選ぶ時、オーブンや電気ポット、コーヒーメーカーといった基本的な物は頼んだが、配送された荷物の中にはフードプロセッサーや電磁調理器だけでなく、パスタマシーンまであったのだ。
ちなみに紗綾は使わないので、箱から出しもせずに収納棚の中に押し込んでいる。
「まあ、でも今はほとんど作る余裕はないが」
仕事が忙しければ、作る余裕などないのはわかる。今は叔父の会社の支援でも動いているからなおさらだ。
いつか、央臣の手料理をご馳走になる日が来るのだろうか。
それとも一緒にキッチンに立つことがあるのか。
想像するのもおこがましい気がして、うまくイメージできなかったが、料理に期待されずに済みそうなことに少しほっとする。
食事を終えると、紗綾はふと思い出してバッグからあるものを取り出した。
「あの、これ」
テーブルの上に新居の鍵を置く。

いつか渡したほうがいいだろうと思っていたが、今日直接会えるので持ってきたのだ。
あのマンションは央臣が購入した。だから鍵を持つ権利はある。
――たとえ、彼に住む気がなくとも。
「これは？」
「新居の鍵です」
央臣は無言でその鍵を見つめる。
彼がこれをすんなり受け取るか、それとも不要だと言うか、いくら想像してみてもわからなかった。
別居婚のつもりなのであれば、それはそれで構わない。だが、この際はっきりさせておきたい。
いつ引っ越してくるのかハラハラしたくなかったし、住む気がないならないで、もう少し狭い部屋を提案し直したい。あそこは素敵だけれど、一人で暮らすには広すぎてなかなか馴染めないのだ。
「今は、いい」
今までの会話の流れが嘘のように、央臣は硬い声で端的に告げる。
紗綾は一瞬息を止めたものの、すぐに覚悟を決めて問うた。
「それは別居婚をするということですか？」
「違う」
央臣はきっぱりと即答する。
広すぎるマンションの部屋。特別な調理器具たち。主寝室にある大きなベッド。
それらはいずれ彼が引っ越してくるつもりがあることを示唆しているのか、ただのカムフラー

ジュのためのものなのか。
『では、いつ？』
続けて問おうとして、紗綾は口を噤んだ。
仕事が忙しいから、いろいろ落ち着いたら――それが本当の理由なら『いつ』なんて明確には答えられない。でも引っ越す気があるのなら、鍵ぐらい受け取ってもいいはずだ。
「いずれは引っ越す。でもそれまで鍵は君が持っていてくれ」
いずれ――それは一か月後か、半年後か、それとも――？
だがそれは央臣が決めることだ。彼なりの理由や事情があるのだろうし、この様子では聞いても答えてはもらえなそうだ。
（もしかしてやっぱり……本命がいるのかな？）
紗綾に妻の役割は求めないと言ったのは、裏を返せばそれを担う女性がいるということで。
対外的には妻とはできずとも、それらしき相手がすでにいる。紗綾に説明しないのもそのせいか。
わけありの相手を隠すための結婚。
央臣の立場ではあからさまな別居婚はリスクになるから、引っ越してくる気はあるのだろうが。
（まあでも、同居したって毎日帰ってくるとは限らないか……）
どんなに考えても紗綾に答えなど出せない。
だがそれが自分に課せられた役割なら、融資の分は請け負うつもりだ。
「わかりました。ではお預かりしておきます」

むくむくと湧き上がりそうになる妄想を振り払うと、紗綾は鍵を再びバッグにしまった。

＊＊＊

央臣はタクシーの後部座席で隣に座る紗綾に、ちらりと視線を向けた。食事を終えて『家まで送る』と言うと、紗綾は戸惑いながらも応じてくれた。
指輪を選んでいる時は緊張していた。食事の間に少しは気を許してくれたような気がした。
けれど、今また緊張と警戒を滲ませている。
お見合いをしてから今日まで、顔を合わせたのは片手で数えるほどしかない。だから彼女の態度も理解はできる。
（もう少し時間が取れるようになればな……）
せっかく結婚したのに……いや、強引なやり方で結婚に持ち込んだからこそ、時間をかけて彼女との信頼関係を築きたいのに――とにかく余裕がない。
自身の会社を経営しながら、同時に紗綾の叔父の会社の支援をするのは、央臣の想定以上にハードだった。叔父の会社はただ金銭的な援助をすればいい状況ではなく、根本から見直す必要があったのだ。
今日だってなんとか時間をもぎとって、結婚指輪選びを理由に紗綾と会う機会を作った。
（今は、仕方ないか）

央臣は心の中で盛大なため息をつくと、視線を窓ガラスへ向けた。そこに反射して映る紗綾の横顔を盗み見る。
ようやく自分の存在を認識してもらえたのに、やっていることは昔と変わらないなと思う。
央臣は紗綾のことを一方的に知っていた。
いつもなら参加しない、母校の卒業生が主体となって開催するパーティー。
卒業生の同伴者であれば誰でも参加できるので、母校のネームバリューに引き寄せられる輩が人脈やら出会いの機会やらを求めてやってくる場だ。
パーティーの内容によってはあまり上品でないものもあり、面倒に巻き込まれるのが嫌で央臣自身は興味がなかった。
だから、あのパーティーに参加したのは本当にたまたまだった。
その時は仲のいい同級生が主催しており、若手の起業家やその卵を中心に開くということで、応援の意味で参加したのだ。
「毛色の違う子がいるな」
「どうやらお嬢様学校出身らしいぞ。あれは男のほうが自慢したくて連れまわしているんだろう」
会場で耳に入ってきた会話に、なんとはなしに噂の対象に視線を向ける。
そこには、彼らが言うように毛色の違う女性がいた。
派手でどちらかといえば肌の露出の多い服装の女性が大半の中、真っ直ぐなストレートの黒髪とクラシカルなワンピース姿は清楚で、逆にそれが珍しくて注目を浴びていた。

ナチュラルな化粧のせいか、顔立ちは整っているのに全体的に地味な印象だが、彼女にはそれが似合っているように見えた。
連れ立っている男のほうは同窓の後輩で、大半の参加者と同様どこかの企業の御曹司らしい。目立つ特徴はないが真面目で穏やかな顔つきをしている。
ただ、どこかコンプレックスを抱えていそうな弱気な雰囲気だった。
だから、こんなパーティーになど興味がなさそうな女性を、まるで見せびらかすようにパートナーとして連れまわしているのだろう。
「まあ、結婚するならああいうのがいいのかもな」
「確かに」
口数少なく、でも真摯に話に耳を傾け、時折淡くほほ笑む。
慣れていない場にもかかわらず、周囲にも気を配り、同伴している男をさりげなくフォローする。
見慣れないタイプだから目が離せないのだろうか。
そう思い、しばらくその姿を追っているうちに、央臣の中で過去の記憶と現在の姿が重なり合った。
（……あの子だ）
真っ黒な長い髪。あの大人びた雰囲気。落ち着いた表情。
（間違いない）
初めて見かけた時の彼女は、まだ中学生ぐらいだった。

十歳以上の子どもなら誰でも参加できたクリスマスシーズンのパーティー。初めての社交の場として、練習を兼ねて参加させる親が多く、央臣も初参加の妹のサポートをするために付き添っていた。

ドレスコードと基本的なマナーさえ守れば、あまりうるさくはない。妹も仲のいい同級生と一緒にいたし、央臣も友人と歓談していた。

そんなふうにして、パーティーも中盤にさしかかった頃だった。

子どもたちの緊張もほぐれて騒めいている中、妹がトラブルを起こした。はしゃいだ時にぶつかってジュースをこぼし、同じ年ぐらいの女の子のドレスを汚してしまったのだ。

その子は外国人の子で、日本語が通じなかった。たまたま、央臣も女の子の両親も近くにおらず、女の子は英語でまくしたてながら泣き出した。妹も、言葉がわからずとも責められていることは感じたようで泣いてしまう。

その時、間に入ったのが紗綾だった。

まだ中学生らしき女の子の口から紡ぎ出される流暢（りゅうちょう）な英語。

『大丈夫？　ジュースでお洋服が濡れちゃったのね。今すぐホテルの人を呼ぶから安心してね』

彼女はそう声をかけると、英語と日本語を使い分けて二人の女の子たちを慰めた。ちょうど騒ぎに気づいて駆けつけた女の子の両親にも、英語で状況を伝える。

そうして、すぐにやってきたホテルスタッフに請われて、紗綾はそのまま女の子家族に付き添って行ってしまった。

騒ぎの中心に妹がいることに気づき、人だかりをかきわけながら近づいた央臣は妹を慰めるのに必死で、彼女にお礼を言うのもままならなかった。

あとで先方にお詫びに行ったが、その時にはもう彼女はいなかった。ホテルスタッフに聞いても、本人が口止めしたのか素性を知ることはできなかったけれど、央臣の中でその場面は強く印象に残った。

周囲がどう対応していいか戸惑う中、ためらうことなくその場に飛び込んだ度胸。中学生とは思えない英会話力。落ち着いて対処する大人びた雰囲気。

一方的に見知っていたその相手が、大人の女性となって目の前に現れたのだ。

あの時のあの子が――大きくなって、綺麗になって、今ここにいる。

初めて見かけた時と同じ衝動が湧き起こる。

だが、自分の中で生じたそれがなにかはわからない。

同窓ということもあって相手の男の名前はすぐに判明した。さらに探っていけば彼女の名前も知ることができた。

彼女はあの時の出来事を覚えているだろうか。今さらお礼を伝えるのもおかしいだろうか。

そうだ、関連するパーティーに出席すれば、また彼女の姿を見られるかもしれない。お礼を伝える機会があるかもしれない。

今まで興味などなかったパーティーに央臣が顔を出すようになったのは、それからだ。

――彼女には恋人がいる。一年以上も付き合い、公の場でも二人一緒にいる。男の立場からして

立ち読みサンプルはここまで

も結婚を視野に入れた交際であろうことは明らかだ。
相手の男は、多少頼りないところはあれど悪い人間ではない。彼女をトロフィーワイフのように扱っているのはひっかかりを覚えるが、見せびらかしたい気持ちはわかる。
今さら、何年も前のあんな些細な出来事ぐらいで声をかけるのはためらわれた。
（幸せそうならいい）
最初は本当にそう思っていた。
そのうち、友人兼秘書の反町には、誰が目当てでパーティーに参加しているか気づかれた。
「それって、一歩間違えればストーカーじゃねえの？」
「パーティーに参加するだけだ。それ以上の行動は起こさない」
自分が周囲にどういう目で見られているかぐらい自覚している。中途半端に声をかけて、彼女に迷惑をかけるような事態は避けたい。そもそも、結婚前提の恋人がいる女性にちょっかいなどかけたりはしない。
パートナー役が必要なパーティーに参加する時は、伝手のある友人に頼んで人を雇った。特定の女性を伴えば、周囲に特別な関係とみなされる可能性が高い。
だから必然的に毎回連れまわす相手が変わり、女好きという印象が定着してしまったが、央臣はそれでも構わなかった。
（遠くから見守るだけ。幸せな姿を見届けられれば、それで満足だ）
そう思っていたのに――数か月、央臣が仕事で日本を離れている間に、紗綾と男との関係が変化していた。
「最近、他の女と一緒にいる」
「別れたのか？」
情報をもたらした反町に問えば、「別れてはいないらしい」と答える。
浮気なのか二股なのか。結婚前の遊びなのか。心変わりをしたのなら彼女を手離せばいいのに、曖昧な関係を続けている。
浮気を知れば彼女は苦しむ。別れれば傷つく。それなのに。
「央臣、あの男の相手、いわくつきの女だ」
「いわくつき？」
「恋人のいる御曹司を狙っては、ゲーム感覚で落としまわっている女だよ。やり方が汚くて、恋人の女性を貶めることで別れさせる」
反町が言うには、悪意ある噂を流したり遊び人の男を引き合わせたりして、女性を陥れるのを楽しんでいるらしい。御曹司の恋人という一見勝ち組の女性を底辺に追いやるのも目的のひとつのようだ。
二人がなかなか別れないから業を煮やしたのか。紗綾が養女で、さらに引き取られた先の家業の経営悪化を知ったからか。
「会社を追い詰めたうえで手を差し伸べれば、若くて綺麗な女性を従順にさせることができるかもしれない――そういう噂を流して、金持ちで質の悪い男たちをそそのかしているらしい」